ヴィルヘルム１世 (ヘッセン選帝侯)（出典: フリー百科事典「ウィキペディア（Wikipedia）」）

ヴィルヘルム１世（Wilhelm I., 1743年6月3日 - 1821年2月27日）は、初代ヘッセン選帝侯（在位：1803年 - 1821年）。初めはヘッセン＝カッセル方伯（ヘッセン＝カッセル方伯としてはヴィルヘルム９世、在位：1785年 - 1821年）。ヘッセン＝カッセル方伯フリードリヒ２世とその妻であったイギリス王兼ハノーファー選帝侯ジョージ２世の王女メアリーの息子。
1743年6月3日にカッセルで生まれ、兄のヴィルヘルムが既に夭逝していたため世嗣となる。1764年にはデンマーク・ノルウェー王フレデリク５世の王女ヴィルヘルミーネ・カロリーネと結婚し、彼女との間に２男２女をもうけた。
ヴィルヘルムは1785年10月31日に父のフリードリヒ２世が死去したためヘッセン＝カッセル方伯ヴィルヘルム９世となり、当時ヨーロッパ最大級といわれた資産を相続した。また、ヴィルヘルム９世はロスチャイルド家の祖であるマイアー・アムシェル・ロートシルトと1775年に知己を得、1801年から彼に財産の運用を任せるようになった。ロートシルトはこれを奇貨とし、現代まで続くロスチャイルド財閥の基礎を築いた。
1803年、ヘッセン＝カッセル方伯に選帝侯の資格が与えられ、ヴィルヘルム９世はヘッセン選帝侯ヴィルヘルム１世となった。しかし1806年、選帝侯国はジェローム・ボナパルトを国王とするヴェストファーレン王国によって併合された。そのためヴィルヘルム１世はホルシュタインおよびプラハへ亡命したが、1813年のライプツィヒの戦いでナポレオン・ボナパルトが敗れると領土を回復し、1821年に死去するまでその地位にあった。なお、ヴィルヘルム１世は神聖ローマ帝国が解体されたにも拘らず「選帝侯」の称号を用い続けた。
ヴィルヘルム１世が死去すると、次男のヴィルヘルム２世が後を嗣いだ